



高橋氏家系
五

^ 13
2890
5



門へ13
2890
巻5

繪本報仇安達原冊之五



第七編

箕山

文亭主人著

門人

辭元齋叟校

傳藏賊之醜ハ雲ハ席ハ同ハ之傳藏ハ話

却説山川傳蔵ハ兵庫ハ妻ハ秋ハ子ハさハるハ而ハ出ハ會ハ奸

子切善ハりハ。欺ハてハ陰ハ賊ハのハ悪ハ欲ハ専ハみハ之ハ其ハこハろハ律ハ回ハ目ハ

又同国金岳山の峠ハさハくハかハるハ左ハ側ハハハ日ハ既ハにハ昏ハれハもハ

素ハよりハ好ハむハ夜ハ路ハなハれハばハ些ハもハ躊ハ躇ハなハくハ過ハすハ是ハ所ハ

素ハよりハ好ハむハ夜ハ路ハなハれハばハ些ハもハ躊ハ躇ハなハくハ過ハすハ是ハ所ハ

素ハよりハ好ハむハ夜ハ路ハなハれハばハ些ハもハ躊ハ躇ハなハくハ過ハすハ是ハ所ハ



昭和九年七月九日 購求

一里を登り一里を降の徑路高低盤曲よりを歩行
がく時二月春雨より路にり行木木の蔭蔽の茂
こより大漠救十人頭より前路を遠りこなく口を均と
呼てり。過客路費を残りこなくれく我より惠てり
四隅より回擁と手兵卷を閃くを否といふ直子害
すづき勢あり傳言を静より我も汝ちが業と
やる孫樹客。近曾傳余かれ偶奪ところのとも
多く赤貧より功なり若汝等令負する餘りあ
らば我も借与べりとらば賊首とおぼし者大子累
て黄口の汝滯よ言を吐て若一錢の貯なくは何を

裸躰より衣服大小を悉く進取せよ自傷
り盜賊より我を謀り欺んとす憎き彼奴が大擔を
辛めを見べと各鎗眉尖刀の得との槍て付てくれ
傳蔵腰間の刀が被逆の刃も乱れぬ刀法を須臾
の中子二人と切伏せ五人は疵を負せられはさす猛悪の
者かれども敵がく之思ひんこなく林子の粟子進
入れば傳蔵獲て進行林の中子素行彼奴が
有るれば奪一もの僕ものせ。四五甲もあつ追こ
りしが盗兇をこらふ見くさぬは詮方なく捕七林樹の
杖葉茂りたる所彼不這と搜一索し思ハ必進

あざむつてつ冊

と失ひ廻れる溪に道を通原道と朱公夾谷子入る水は
大なる疲勞する少封休見とすれども雨より山石木は
して橙とかなす可処なり大に幸ども吃と眼とをむれ
遙くむふ一箇の火の光看りゆゆ一人家なると徑を
覓るに人ゆく跡なく驚かづと取つて道かき
攀のぼり漸く其所より見よ老樹陰々と鐵系
の光明はほろろ人の言あり壁の隙よりと定規に
一人の老嫗火爐の下に坐す今一個の男が年齒廿三四
なり手は珠骨なりと西翁悪く髯は長くそと山

賊とも見づるもの彼老嫗が眉辟と搭持拵へ其もの
かぐるが耳は悉く奪持の味あり傳言はいよく彼奴は
盜賊の首なると思ふ漢の手匠もあると表く廻
これバ顔放とる紫恒困戸たればほとく敵に申す
と彼廿三四歳の仕備あま何者とたづねるに傳言は
常とる声して其の東州は赴く過者なるが是山中に
を運ぶ殊に雨より道にりて夏の折かき火の見ゆ
るを便に高き事と何幸一夜あるとんをうと
これバ婆内子是を軍と弄台て嬉びつぐそれハ昇さ
莫と唾うら芳おいえ心に配なくとぬく宿と申す

よむつがのり

とつ子。傳蔵も力と得たる心地を見も夏夜あろく見
あいて等子着りぬ。頼て石具養と供り見見火
の突もどあり。山中より石音ぬ美食なり。傳蔵がを
心と救ず。助とるを食せしに。八雲。燈のうけよりつりくお
ま。山川傳蔵より借もよく似たりし人の有るよ若也
兄弟もてもあんと。試すと。田んぼのりり。旅客何
舟の人。名と何とつ。あつと。つ。相村録倉の七
のなるが。公移あり。つ。美村。ま。り。名。山川傳蔵と告
と。若。り。ぬ。八雲。川。奇。怪。の。夏。も。あ。る。の。よ。と。怪。し。き。と。子
ハ。億。気。一。サ。馬。不。審。と。ぬ。ア。バ。サ。ね。ど。強。気。の。嘔。り。ぬ。バ

辟魂白来るとも。懐ろく。非と。心。丈夫。取。る。と。言。や。
ハ。其。山。川。傳。蔵。と。な。ん。ハ。安。部。惟。之。の。娘。ハ。彼。と。均。死。や。事
先。子。毒。が。鎌。倉。子。若。一。時。の。吐。し。と。つ。傳。蔵。自。若。と。し。て
その夏。かり。我。れ。お。ま。ハ。ざ。り。を。回。宛。の。死。を。る。一。回。檀。入
く。谷。子。拾。ら。れ。く。と。八。雲。と。あ。り。と。一。夜。の。を。り。子。檀。を。撥
り。衣。扱。の。り。に。刺。じ。退。後。の。値。も。え。あ。り。一。子。夜。落。の
身。子。お。ぼ。く。唇。を。濡。せ。一。巾。一。子。黄。泉。飯。り。辛。ト。を
稍。余。を。拾。し。と。信。る。子。軀。か。よ。く。と。失。笑。て。今。過。客。の。証
か。り。と。取。子。八。雲。と。や。ん。軀。の。衣。を。剥。て。その。後。露。の。口。吻。を
浸。し。更。し。その。神。路。を。そ。ま。く。さ。り。め。し。と。つ。傳。蔵。云

とあぢつてのつ冊五



まされば其夏よて^ス ^セハ言なぐ^ク去^ルぬ^ル不審^ニ回^ルふ
 之略^カやう申^スえ我^レ計^ルざり^キ難^シと^シ人^ガお^ハち^ニお
 へ^ク例^ニや^シ看^レれ^ハ小^シ皮^ヲり^ウい^ハく^シ分^カれ^テも^シ續^ク
 け^レバ^ハ淫^ニる^ハ後^ト土^ヲ復^スる^ハ我^レハ^ハ最^モ早^ク鎌^倉子^ノ鮫^ノ面^ヲ
 ふ^テも^ハ男^ヲ何^ノ世^トと^アて^ド何^ノ教^流る^ハも^ハ廣^クた^ラる
 臭^原子^ノ如^クと^シ日^落雨^ノそ^レ復^ル飢^ハつ^レぬ^ハ又^モお^ハれ^マ
 へ^シ男^ト一^ノ子^ノ夢^トも^ハく^シ幻^子看^テ小^シ皮^ノ容^顔ち^デ
 右^枝有^葉と^ハもの^ガる^ハ我^レ是^トと^シ何^ノと^シハ^ハ老^婦
 斬^ニ笑^ト今^ヨも^ハこれ^バめ^づり^キ人^子逢^トよ^キ妻^ト半^ク
 面^ヲも^ハと^モ有^ンと^シ子^ノ信^道み^マす^ハも^ハあれ^ど見^ル

と^ハ見^ルぞ^レバ^ハ志^バ一^ノ沈^吟一^ノル^ハも^ハ渡^リ子^ノそ^レな^リれ^バ
 妻^ト也^ハ語^リえ^ハ必^ズお^ハど^ろり^キな^ヨ家^ノ一^ノハ^ハ雲^ノなり^ト
 二^ハ流^石の^信道^也目^ノ冷^気み^マく^ハ慄^ト皮^膚も^ハ立^ル
 る^ハ撫^トと^シえ^トお^ハさ^め實^也斯^クあ^ル夏^也と^シつ^クみ^ハれ^ハ
 其^係ハ^ハ雲^ノり^リ水^バ手^ト指^相笑^テさ^テも^ハ不^意を^ハ奇^ニ
 偶^々今^ヨ宵^ハ夜^も子^ノか^クり^マえ^ト昔^ハあ^ハり^テ深^ク
 何^モなく^ハ只^ハ燈^ノの^押も^ハ眠^ル丑^ノあ^リ又^ハ目^トを^ハ痛^ク火^ト
 掛^ゲ積^ルる^ハい^ハの^言の^先傳^道婦^ハ云^ハり^テ老^女ハ^ハ山^ノ
 申^ス潜^テ昔^ノを^ハ何^ノお^ハし^テと^ハハ^ハ雲^ノ答^ルる^ハ子^ノ藤^ノ
 人^ト聚^リ金^ト奪^ハハ^ハ衣服^トを^ハ剃^テ葉^トと^シ幸^ニ旅^客也

さくまらぬバ昔ガ禍ヲ遭べざるまど昔ガりの友人
ヲ救ハ救ハ糸するりとつよ。傳道ハさく其百又きた
れバ姫子つよ子ぬい好子業とありらるぞ我カ山賊
強盗之將也世と送りなす。後子也前取強盗ハ武者の
常ともあぬバ。耻るくやう申とつよ。ハ余カ勢と
えとゆり。ゆれより送子心そやえとちよカと合して
んとつよ。相同しを信前ハ送子あ子是と止め是より
諸州子徘徊して盗賊と働さり。爰又駿州富士
郡の知懸江河カ時守と云ハ仁心厚子あり
らる。近來偷賊あふくて處之方隅ハ詭衣て且

往還の旅客とくありぬバ。其の御里是の國甚より
盜賊征伐の愁詔日日其祈盛らぬバ時守も悔をなむ。
早時其用事ありて捕人三百有餘。葛原の山中あり
先福め術々として彼地是地と探し斬殺討瘞を伴
りぬバ。許多の賊あつて因獲かこは殺され。既山ふく
逃入とつよ。其素の道しりぬバ送子是と止めがくは
く。隣州又州一も其征討ありりぬバ。彼金兵衛
其他別外傳道とつよ。幕下の餘黨も情
し衆人の甚治子ハ時守公の情送たることしりぬバ
又州の諸侯へも運達し悉く盜賊を退治めよ

徳川家康公御書

二二

軍ごうりぬは。是ふもまのぶがごとく。世思ふ人。八雲の徳
黨何州もなぐ。逃矢もる。

第八編

忠六術と觀ども報仇と誓
答太時が候ふ乞暇と告

却説み早川答太身ハ先子父兵庫と古の昔歎き
終ざるに石日ほして。又世の横死に遭悲歎の上。突と
加へ更子揚をぬおもる。父が同僚山岩殿軍内も深
く。大守景高公も上同子達。一りぬバ殿主も甚
く。一日早川竹占太身ハ父の已心日。當
てあぬバ墓所子指んと。隸忠六とる連只二人誓程

瓜清浄寺へ赴一には行すが。丘と越へ野歩く。行子
前日西ふり之安須川と。一小河一漚み水もろ。持づく
橋もろく。最も是川ハ流しして。恒子圓を是履
と。脱ず水浸ざぬバ。地橋どもろ。答太忠六。こめさ。あま
来りり。忠六ハ竹占太身。向ふり。あま。是川常ハ滑
や。に昨夜の雨陰りぬバ。かく水溜々。く。あ。中
滑べく。七看されバ。是川下二界。あ。り。迷。牛。あ
之。答太。上。汝。是。下。の。浅。渚。と。あ。ぎ。我。り。あ。と。あ。り。
好で。滑。み。あ。ま。ざ。れ。ども。又。母。の。仇。と。誓。む。と。晝。夜。も。信。行
せ。武。術。の。程。も。あ。ぬ。バ。聊。汝。子。見。を。か。く。く。と。言。話。し

忠六の物語



山崎の川



彼川を向上一躍り踰りぬれば忠六大に感激しをたふす
どとが思ひも。斯く忠六の用意は情さうさうなれは河
下の少流を迂り流ぬお行方も皆太よむらあつた。
即今君の偕行の種麻石のほど感心つく侍るなり是
上の一日に多く先君の仇と報りたう。思れあふく
存意ども。僕も徒行余命くれ。斯主君の仇と報りたう
まごよ侍れば砦虎野野邊々々もさうしつて
しつては皆大さうも打復てつたよ。まごよも斯くも
てず告ぐれ。今りいむの忌日よあつたり又思ひあ
せ一日と吉日とつる事もあれば悦々聖前を心

願の母也と告奉りいふ。報仇首途の装を整べ。いふ
主君の殿命も有るれば山名殿もたのむれば外祖も若
い告べ。とく心と来。遂は清浄寺へ詣りて聖牌を
告奉り。いふ。彼是れ内へあつたれば忠六もあつた
も出で。徒丈よ向ひ今日墓墓の路を同越のともぬ
又の復讐の心なく申しきと告りれば徒丈も徒丈も
おもひ皆古太郎も喜びれば皆復讐。いふ。度々
徒丈も言をそく即ち岩峯も一合り。いふ。報仇
虫まのよ。相洗も及りれば軍内告り。いふ。相洗も
弟肖して天晴の一言うぬ。其の方復仇の報ち宜るを

らぶつたつたつた

の

おれも末小統とて。我々も亦おぼつた。今且く生
長と待たれり。子。よ。く。も。是。件。と。言。ふ。べ。し。ら。る。よ。
早川兵庫が令嗣。い。く。も。思。ふ。ら。れ。ば。天。晴。後。世。よ。也。
の。名。と。言。ふ。早川家。連。之。方。の。器。量。も。る。べ。し。と。我
身。早。ね。て。候。り。り。夫。より。山。石。原。の。若。太。郎。と。伴
ひ。大。守。景。高。公。子。是。より。と。白。上。報。仇。夜。更。と。り
た。ま。り。と。西。人。諸。君。も。も。願。り。れ。ば。大。守。景。高。公。も。感
心。お。ぼ。し。め。られ。の。た。り。り。の。油。力。童。と。り。又。款。い。う
ら。る。年。孫。の。者。も。と。れ。ず。辟。疫。足。の。上。幸。な。環。合

と。も。容。易。に。討。得。し。も。計。が。く。孝。子。仇。と。憤。の。心
忙。く。み。あ。れ。ども。今。二。三。年。武。勇。が。類。を。あ。れ。ば。汝。十。七
歳。も。か。る。べ。し。心。ろ。事。急。な。れ。ば。必。過。と。り。古。讀。も。あ。れ。ば
延。種。い。く。す。べ。し。と。許。諾。を。り。り。大。守。の。費。之。も。ふ。ま。と
し。い。ま。な。れ。と。軍。内。す。こ。も。也。と。告。上。り。ら。ば。尊。命。謹
て。承。り。い。う。平。竹。右。太。郎。あ。ら。が。う。存。奉。り。候。也。
告。上。夏。子。侍。れ。ども。皆。太。郎。何。分。も。報。仇。願。は。し
夜。を。告。し。と。り。一。日。も。と。り。啓。歩。し。度。候。也。
つ。き。某。も。止。更。り。今。日。貴。前。に。ま。かり。つ。ぐ。供。を。も。頼
り。上。へ。ん。べ。ら。る。り。何。卒。是。上。暇。日。免。件。と。り。お。う。れ

早川兵庫の令嗣

早川景高の子

候一に有がくくぞんずらうと。ソく心とくぞんずらうと。用て告上りれば。流石仁兄の景高つらく思惟たまは。克も乳いでく勇推き孝子の心ろや。さば宿思のごとく乞骸とと下する間早く二親の仇を復あを。宿彰成塾の上芽出度飯黍さすべし。路費百兩及び国光が銘刀と鐔別と下におられ。若太郎は悦喜いそる。再三是と頂戴し。ありがく大守の荷思何日うられと忘ぬと。感心候とも。暇と取られ。厚も大守景高公貴。益とたまらう。其後ある任を啟行すすべしよ。

一會に付られれば。岩隈軍内。若太郎とて。出づり。忠六と召連赴み。一族健丈とて。若れく行装と見。吉辰と撰。白の空射。中。猪も。孫の首途と看送り。とん方る。其日。健丈岩隈とて。道一里。歩木林の邑。送り別を。

あぶら

十二



昔者秦之與州の國界は離けり。此よりハ六十六部或ハ
 順拜と改めたり。又ハ漫遊乞食と身とアリ。衆自
 の外口よりハ投び。嚴冬苦熱の患といふは。此の
 づ。得素也。ある山林荒野に伏す。もしも此の
 隙か。この僻地寒村に匿み。主従あるを所り
 長路艱難の地を互り。相送を扶助して夜ともなく
 看ともかり。素探一行は。後州荊之原の郡に至
 士人の巷治と曰ふ。是頃富士郡の知懸江河時守
 と云。人盜賊征伐あり。由又此節までハ盜賊の
 患少なく。元来ハ奥州の金岳山に。魏利桓と云。

盜賊あや。竹下を俱。此餘當星のもの。夥く。因
 獄に。今ハ彼。其後とかく。行街され。され。行
 某もその。捨。時。ある。と。莫。巷
 説あり。と。皆。忠。天の告。と。思。云
 君。又一人の老人。例。ある。と。彼。利。桓。の
 名。ハ。八。と。下。を。カ。より。三。四。で。ハ。推。限。の。後。す
 たり。し。其。あ。の。所。に。彼。丘。山。録
 といふ。取。一。世。君。ん。と。され。た。と。是。は。と。知。所
 愁。語。あ。川。と。出。し。ハ。八。雲。と。い。ふ。盜。賊。の。手。下。辛。く。糺
 明。拷。問。の上。白。上。り。し。る。と。後。話。と。同。二人。ハ。大。小

懐^まび。管^{くだり}太^お身^みハ忠^{ちゆう}六^{ろく}小^{せう}向^{かう}ち^ちり^り了^り。今^{いま}此^{こゝ}を^をめ^めと^と聞^きこ^こ
 嚴^{げん}父^ふ慈^じ母^ぼと害^{がい}や^や山^{さん}川^{せん}傳^{でん}道^{どう}も^もお^おも^もし^し彼^か八^{はち}雲^{うん}と^とや
 ぶ^ぶふ^ふ女^{にょ}の^の賊^{ぞく}の^の一^{いつ}徒^とな^なん^んと^と思^{おも}は^はれ^れば^ば。一^{いち}先^{せん}富^ふ士^し郡^{ぐん}の^の
 知^ち懸^{けん}時^{とき}守^{しゅ}子^し出^で會^{かい}つ^つて^て。囚^い獄^{ごく}の^の盜^{とう}賊^{ぞく}た^たゞ^ゞ見^みば^ば事^{こと}の^の重^{おも}
 静^{しず}も^もヒ^ヒり^りか^かえ^えと^と思^{おも}は^はる^る。是^{こゝ}を^をい^いう^うを^をヨ^よ申^まれ^れば^ば由^{よし}の^の
 思^し吟^{いん}い^いて^て然^{しか}る^ると^と同^{どう}く^くを^を遂^{つひ}に^に富^ふ士^し郡^{ぐん}を^をさ^さす^すて^て
 行^ゆ也^や程^{ほど}を^をく^くし^しを^を竹^{たけ}宮^{みや}江^え河^がか^かり^り時^{とき}守^{しゅ}子^し對^{たい}面^{めん}し^して^て借^か
 苦^{くる}入^いる^るよ^よ鄙^び村^{むら}ハ^ハ美^み州^{しゅう}福^ふ島^{じま}候^{こう}。徳^{とく}原^{げん}日^{にっ}京^{けい}高^{こう}の^の家^け臣^{しん}
 早^{はや}川^{がわ}管^{くだり}太^お身^みと^とも^もよ^よす^すもの^{もの}。是^{こゝ}を^をい^いふ^ふが^が父^{ちち}の^の仇^{かたき}を^を報^かり^んと^と
 ぬ^ぬ本^{ほん}国^{こく}と^と出^で地^ちと^と。彼^か是^{こゝ}を^を索^{たづね}め^め折^おり^り是^{こゝ}を^をぶ^ぶら^ら。巷^{ちやう}の^の宿^{しゆく}

とうけ^{とうけ}なる^るに^に當^あ都^と督^{とく}民^{みん}の^の愁^{しゆう}心^{しん}憂^{ゆう}の^のゆ^ゆゑ^ゑに^に次^{つぎ}血^ち絨^{じゆう}禁^{きん}仗^{じやう}の^の
 よ^よ一^{いち}事^{こと}か^かれ^れば^ば金^{きん}岳^{がく}山^{さん}の^の偷^{とゆう}倪^に許^{しよ}多^た當^あ知^ち懸^{けん}又^{また}囚^い獄^{ごく}と^とす^すを^を
 う^うけ^けの^のゆ^ゆば^ば人^{ひと}々^々父^{ちち}を^を害^{がい}せ^せし^しとも^も。孫^{あひま}め^めお^おも^もふ^ふ是^{こゝ}を^を盜^{とう}賊^{ぞく}
 の^の不^ふ房^{ぼう}な^なれ^れば^ば索^{たづね}獲^わの^の便^たと^とも^もか^かん^んや^や此^{こゝ}を^をい^いふ^ふ事^{こと}の^のく^くし^しを^を
 も^も見^み耳^{みみ}一^{いち}に^に付^つれ^れば^ば熊^{くま}ま^まり^りお^おく^く侍^{さむらい}る^るなり^{なり}。何^{なん}事^{こと}仁^に々^々の^の大^{だい}
 人^{ひと}政^{せい}心^{しん}と^と岳^{がく}の^のゆ^ゆを^を基^{もと}が^が索^{たづね}を^を度^たども^{ども}彼^か盜^{とう}賊^{ぞく}を^を捕^と回^{かい}も^も下^{くだ}れ^れ
 る^るに^に辱^はく^くぞ^ぞん^んを^をか^かと^と孝^{かう}愷^{かい}顔^{げん}面^{めん}を^を發^はして^{して}口^{くち}を^を閉^しぢ^ぢる^るに^に死^しす^す
 り^りぬ^ぬ時^{とき}守^{しゅ}ふ^ふく^く感^{かん}ド^ドに^にや^やむ^むて^て告^つげ^げを^をい^いれ^れる^るに^にか^か推^おし^しの^のた^た
 望^{ぼう}さ^さぞ^ぞう^うし^しぬ^ぬ。配^{はい}子^しお^おり^りさん^{さん}あ^あり^り武^ぶ士^しの^の律^{りつ}外^{がい}に^にし^して^て捕^と
 した^{した}ア^アの^の又^{また}願^{ねん}ある^ること^{こと}を^をろ^ろ目^めを^をな^なれ^れば^ば心^{こゝろ}静^{しず}み^み乳^に恥^ちし^しさ

さぐりとて、領いぬに、竹太下主従大子候が、見附る獄舎の
紳之申出、扱其各とて、下推野、野女とて、盗賊、金岳
山の八雲が、幕下の一臈なるものなり、冒守声と極、野
介、赤糸、りる、河紀明、す、仔細、以、速、告、一、否、
幸、き、め、と、看、て、人、と、四、方、より、例、位、さ、う、か、う、を、責、り、ぬ、
傍、を、何、ま、つ、も、あ、れ、赤、曲、子、告、上、べ、と、之、バ、側、に、控、一、算、
席、子、よ、河、三、年、以、前、勇、州、衣、川、よ、お、お、一、人、の、性、
害、子、セ、一、丸、尋、常、よ、白、上、と、す、べ、と、之、に、野、女、に、怨、入、
て、い、ま、を、又、小、人、よ、そ、ん、べ、ト、テ、昔、か、盗、首、の、老、嫗、八、雲、と、告、
ものなり。其時の勤静、争、い、に、け、り、け、り、傳、へ、ぬ、と、一、日、の

活、み、承、り、に、八、雲、旅、人、子、身、と、あ、り、病、氣、と、り、り、を、山、中、に、
か、を、伏、し、兵、庫、に、伏、せ、れ、り、より、路、を、越、え、て、お、お、
り、れ、ど、も、兵、庫、か、刀、槍、の、乱、さ、り、切、害、な、れ、り、の、有、り、と、
後、八、雲、兵、庫、が、脊、よ、お、お、れ、遂、に、衣、川、と、傍、る、時、八、雲、一、刀、を、
兵、庫、と、刺、さ、り、若、干、の、金、と、奪、さ、り、事、も、あ、り、
ら、う、と、白、上、に、竹、太、下、に、お、お、れ、と、聞、く、候、と、
や、し、女、彼、奴、の、手、を、虎、一、の、お、お、の、孫、念、せ、と、お、お、
の、ど、く、と、塞、し、と、な、り、又、野、女、に、同、じ、に、
黨、め、の、山、川、傳、道、と、云、一、と、の、原、道、を、白、く、上、
と、一、と、野、女、に、お、お、り、と、云、一、と、の、近、曾、小、人、が、黨、め、か、り

あ、ら、う、と、云、一、と、野、女、に、お、お、り、と、云、一、と、の、近、曾、小、人、が、黨、め、か、り

二〇一



一と番しきハ知んト傳ふと之ハ管太郎 竟も白上や
 よれ進々紅べーとそ又素の嶽下下りる。斯て管太郎
 八仇の一十八雲子空たし夏と耳しふハ片時ハ怪き素
 づー恨と報ぐーとそ知懸時守ハ厚く涙言て再ハ
 深惠が報ず時あるとと早言と早しと此處と解
 去りりる扱八雲ハ行街山川ハ有岸下と遍柱と素
 探と下も更子傳ぐ。又傳首ハ八雲と一所ハあると
 もつん。お中子先ハ藤原 郡ハあつと士人の語と聞ハ
 ハ雲ハ素雅良の逃さしと鎌倉ハ住列ハれば其方
 流落くそととりーが其夏もされねハ是よりハるハ

方ハ行下とそ。遂ハ鎌倉ハ出ハ習ハ旅ハ悲ハに
 管太郎ハ何と心あしくそ。回ハなハ音音ハ患ハ羅ハ忠ハ六
 大ハ心配ハ是事ハを深くあんと煩ハつと生ハ生ハ生ハ生ハ
 与ハれハ其驗ハ中ハ急ハ治ハ一ハ看ハれハ鎌倉
 の街末ハ郵亭トリ且ハ帯留ハ一ハ巻生ハ生ハ生ハ生ハ
 心と定ハリ。茲ハ採舎ハ支婦ハのハ一人ハ處子ハ
 リ又何ハ沃崇ハ夜々ハ呀鬼件ハれば支婦ハ是ハ歎ハ
 と。湯屋坊方ハ弱ハ且神ハ新後ハ兄ハ弟ハ
 子強ハく。或日ハ者竹笠ハと軽ハ来ハく。天ハ昔封ハ
 且是ハ大ハ舊猫ハ思ハり。さうねハも海ハ陰ハあると



天人の勇丈とて可し是矢と除く若くは此人とのいふこと
 悪敵のためは必ず後見とす之明日未の下封十四日の社西よ
 り東へ過ぐし是人のうらみ毒猫と除き其容美彦な
 る人とりば支那のもの日頃温順をよめればサレバ疑夏な
 く大に悦び尊く懐くをわろおその翌日みかりりぬか
 帰ハト師の教を随て午時の頃より吾門はイて其人や
 来と待りし所は竹太郎等も解きて忠告も手と申
 れ是の旅亭の門と過り支那其人と看み一箇の美
 男多記十四日曉る紀長るぬども等も解き其時ハ主の
 下封されば是こそと思ふすぐに出逢ひ候と早くと

竹太郎子向の馮の森はる子細の侍れ此へ入るぬと擡て
 清く入りぬ竹太郎の病を帯てあれば波島舟を得る
 うちこそ主従内に入りぬ煙系酒肴はく夫婦百すく
 答に教とすふは思がが下下の容子見まふするに長路の
 瘦るもてむぬんやサオ屋もて身と養ゆべし支子附
 て頼奉るは我軍を憐れむとと驚くは竹太郎の
 のもの質朴は見れば何気なく物心叶くことハ驚くこと
 己のつらば夫婦のむら悦び昔女子の夜に鬼物を白猫の
 深思しより日か音のふた受ども信りりぬ竹太郎は毒をこく
 歎の宿とあれば日か音り兎に有べしとつらば夫婦のむら

あつたつたの冊上

大子悦が如。斯て其夜半も時違を叫鬼伴れれば身うち
 名不存心得しちれば體て主人より頂戴す。国光の刀と
 杖もろく彼處子に向三度切斬りれば歎の泣声もそ
 叫と泣か其値額を息絶り人々水ふさなどせしが
 漸ありて甦醒人あるを得しが是より一途は鬼伴も
 ぬく全杖を得たり。旅亭の夫婦ハ更一街の父老より
 けり。大子よろえんが厚く荷思と涙もるる

簿本報仇安達原冊之五畢



